人間の安全保障の射程
── アフリカにおける課題

望月克哉　編

本書は人間の安全保障を中心的テーマとした研究会の最終報告書である。概念の包括性ゆえに，適用範囲の広さとは裏腹に，その実現の上で種々の困難が伴っている点を，アフリカの事例に即して考察する。

まず，この概念と相互に連関する分野・問題群とのインターフェイスを探り，この概念の適用が多くの矛盾を孕む問題領域にも踏み込む。また国連人間の安全保障委員会が強調した「移動する人々」に注目するとともに，地域社会レベルの問題への適用についても考察した。構成は以下のとおりである。

第１章「人間の安全保障の観点から見たアフリカの平和構築──コンゴ民主共和国の『内戦』に焦点をあてて」（篠田英朗）は，平和構築の分野で人間の安全保障の戦略が直面する困難を，内戦状況に陥っているコンゴ民主共和国を事例として検討する。

第２章「新たな予防外交と人間の安全保障──マラウィの民主化の事例から」（平井照水）は，予防外交の展開を跡づけながら，国内対立といった危機を未然に防ぐための，構造的予防としての民主化についてマラウィを事例として検証する。

第３章「人間の安全保障と国際介入──破綻国家ソマリアの事例から」（滝澤美佐子）は，国際社会による紛争対応としての国際介入が，いかなる条件で人間の安全保障を確保できるのかをソマリアの事例から考察する。

第４章「紛争が強いる人口移動と人間の安全保障──アフリカ大湖地域の事例から」（武内進一）は，「移動を強いられた人々」の安全保障に対する問題意識の希薄さを，大湖地域の事例に照らして考察する。

第５章「『移動する人々』の安全保障──エチオピアの自発的再定住プログラムの事例」（石原美奈子）は，エチオピア政府のプログラムによる再定住サイトと，その人々の現状をフィールド調査に基づいて分析する。

第６章「地域社会レベルの紛争と人間の安全保障──ナイジェリアの事例から」（望月克哉）は，地域社会での紛争管理に取り組んでいるNGOの事例から人間の安全保障の考え方の有効性を考察する。　（望月克哉）

千葉　アジア経済研究所　2006年　v+287p.

特集「民主化」とアフリカ諸国

所収論文執筆者：遠藤貢・
津田みわ・落合雄彦・佐藤章

振り返れば，1980年代末から90年代にかけて，アフリカ諸国の多くが「民主化」と呼ばれる政治変動──主として多党化と民政移管，その後の複数政党制選挙の実施──を経験した。その後，周知のように，アフリカ政治研究者の間でも，複数政党制選挙の様態に注目した民主主義の「移行・定着」論に関心が集まった。しかし，現実には「定着」期に入ったかに見えたコートディヴォワールにおける内戦勃発，三権分立の形骸化が続くザンビアなど，複数政党制選挙の検討に依存した分析では十全に理解し得ない状況が次々と生まれてきた。

「アフリカの国々がどれだけ民主的かを採点するような研究はもういい。具体的に何が起こっているのか，それを探ろう」──この問題意識のもとで，研究会が発足したのは2003年春のことであった。『アジア経済』本特集号は，その後の２年にわたる取り組みの集大成である。所収の各論を紹介し特集全体としての知見を探った津田みわ「特集にあたって」，現体制を民主主義体制とみることへの留保を示すカッコ付き「民主化」という操作的概念を提示した遠藤貢「『民主化』から民主化へ？──『民主化』後ザンビアの政治過程と政治実践をめぐって」，1960年代制定の一つの法律に注目して複数政党制史を再構成した津田みわ「離党規制とケニアの複数政党制──変質する権威主義体制下の弾圧装置」，国内紛争の背景に軍事政権期の制度構築があることを解明した落合雄彦「ナイジェリアにおける『民族問題』と制度エンジニアリング──軍事政権期を中心にして」，競争の場として選挙が定着する一方で当選者の代表性の空洞化が進む様子を実証した佐藤章「政権交代と少数者のゲーム──コートディヴォワールの『民主化』の帰結」の５本からなる。いずれも発見とオリジナルな議論を備えた力作と自負している。皆さんの活発なご批判をいただければ幸いである。

（津田みわ）

『アジア経済』Vol.46，No.11・12　アジア経済研究所　2005年　pp.2−125.